

※ 即身成仏

即身成仏とは、煩惱に覆おほわれた凡夫ぼんぷの身のままで仏に成ることをいいますが、自己の命の奥底にそなわる仏性を開き、安心立命の境界となる最極の功德をいいます。

この即身成仏は、小乗教で説くような煩惱をすべて滅することでもなく、また死んだ後にはじめて仏に成るということでもありません。生きているこの身このまま、煩惱を持ったままの姿で仏の境界を開くということで、これは日蓮大聖人様の仏法を信仰することによつてのみ可能となるのです。

釈尊は爾前經にぜんぎょうにおいて、永い期間にわたつて煩惱を一つひとつ断じながら成仏に向かうという歴劫修行りやくこうを示されましたが、法華經では『提婆達多品第十二』で竜女の即身成仏を説き、歴劫修行をせずに成仏できることを明かされました。

さらに大聖人様は、機根も低く三毒強盛の荒凡夫である末法の衆生に対し、法華經寿量品の文底に秘沈された三大秘法の御本尊を受持信行するところに、煩惱を持ったまま、即身に成仏できる法門を説き示されました。

『当体義抄』新編 六九四ページ

「正直に方便を捨て但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三諦さんたい即一心に顕はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり」

と仰せられ、大聖人様の仏法を信受し、題目を唱える功德によつて、自身の煩惱・業・苦の三道が、苦樂を離れ歎びに満ちた究極の不動の心となり（法身）、清浄しやうじやうにして深い智慧と慈悲が溢あふれる人間性を開発し（般若）、人生を自由自在に遊樂させる働き（解脱）をもたらしことになることと示されたのです。

すなわち、正しい御本尊を、正しく信じ、正しい唱題に励む

（忍難弘通するとき）とき、煩惱はそのまま仏果を証得する智慧となり（煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい、般若ぼんね）、苦悩の人生を克服できる力強い歎びの命へと転換され（生死即涅槃しやうじそくねはん、法身ほっしん）、刹那的で穢れた社会は仏の慈悲によつて浄化された常住の国土が構築されていく（娑婆即寂光しゃばそくじやうこう、解脱）のです。

さらにこの即身成仏の境界は、大聖人様が、

『上野殿御家尼御返事』 新編 三三六

「いきてをはしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり」

と仰せられているように、その徳は今世こんぜだけにかぎらず、未来永劫えいこくにまで及んでいくのです。

また、これらの功德の実証は、

『始聞仏乘義』 新編 一二〇九

「妙楽云はく『若し三道即ち是三徳と信ぜば尚能く二死の河（分段と変易の生死）を渡る。況んや三界をや』云云。末代の凡夫此の法門を聞かば、唯我一人のみ成仏するに非ず、父母も又即身成仏せん。此第一の孝養なり」

と仰せのように、ひいては父母を救い、先祖代々の人々を成仏させ、さらに未来の子孫に福德をもたらすことにもなるのです。

※ 二死 Ⅱ 「分段の生死」と「変易の生死」。

分段の生死とは、三界六道を輪廻する迷いの衆生の生死をいう。

これに対して変易の生死とは、仏道修行によって一分の覺りを得た聖者の生死（見思惑を断じ三界六道を出離した生死）で、衆生済度の願力によって寿命の長短、肉体の大小などを自在に変化・改易できるので、変易の生死という。

深位の菩薩になると、分段・変易の二種の生死から離れ、分真即の証果を得るのであり、その時の断惑証理のあり方を増道損生という。

※ 増道損生 Ⅱ 「増円妙道」と「損変易生」。

このように、御本仏日蓮大聖人様の大慈大悲による仏天の御加護を受け、正しい信心と修行によって三世にわたる福德がそなわり、清浄にして自在な仏の境界を実生活のなかに現していくことができます。これが六根清浄であり、即身成仏の大功德なのです。